

# MEIJI MURA

明治村だより

113 2024 Spring



## CONTENTS

- 明治村の建築に視る日本近代青春群像物語〈十三〉  
幸田露伴「蝸牛庵」  
「十兵衛」であり、「源太」でもある人物のすまい… 02
- 帝国ホテル・ライト館に使用されている意匠及び色彩について… 05
- MEIJIMURA TOPICS… 07 春の催しもの… 08
- A La Meiji-mura 建物に垂れ下がる飾り「瓔珞」… 10 新時代を具現化する天井画… 11



## 明治村みらい基金

私たちの未来を豊かにする「明治」の価値  
一緒に残し、伝えていきませんか

歴史的建造物を中心とした「明治時代からの贈り物」を未来へ残し続けるためには、多くの資金が必要です。明治村事業へのご支援をお願いします。



### ご支援の内容

- ・本物の価値を残し、未来へ伝えるための展示建造物の維持・保存修理
- ・本物の価値を残し、未来へ伝えるための歴史資料の維持・保存修理
- ・未来の指針となる明治時代の価値を伝えるための展示(常設展及び企画展)
- ・明治時代製造の蒸気機関車及び京都市電の動態展示
- ・博物館明治村の事業全般

1回3,000円からご支援いただけます(マンスリーサポーターは月額1,000円から)  
公益財団法人明治村へのご寄付は一定の「税制控除対象」となります。

### ご寄付の方法

明治村みらい基金へのご寄付は、以下の方法で行うことができます。

- ・クレジットカード
- ・金融機関からの振込
- ・ゆうちょ銀行からの払込

詳しくは博物館明治村公式サイト内  
「明治村みらい基金」をご覧ください。



## 協賛会員 (令和6年3月1日現在)

敬称略・五十音順

### ゴールド会員

- 大成建設株式会社
- 名鉄都市開発株式会社
- 矢作建設工業株式会社

### 一般会員

- |                     |                 |                      |                 |
|---------------------|-----------------|----------------------|-----------------|
| アイカ工業株式会社           | アサヒ飲料株式会社       | アサヒビール株式会社           | 厚見建設工業株式会社      |
| 株式会社安藤・間            | 株式会社磯部組         | 株式会社伊藤園              | 伊藤忠商事株式会社       |
| 因幡電機産業株式会社          | 株式会社魚津社寺工務店     | 株式会社エイムクリエイツ         | NTP名古屋トヨペット株式会社 |
| NTT都市開発株式会社         | 株式会社NTTファシリティーズ | 株式会社大林組              | 岡谷鋼機株式会社        |
| 株式会社オノコム            | 鹿島建設株式会社        | 株式会社関電工              | キリンビバレッジ株式会社    |
| 株式会社熊谷組             | 株式会社鴻池組         | コクヨマーケティング株式会社       | 五洋建設株式会社        |
| 合資会社斉木研磨工業所         | 株式会社ザイマックス      | サッポロビール株式会社          | 佐藤工業株式会社        |
| サントリーコーポレートビジネス株式会社 | 株式会社シーテック       | 柴山コンサルタント株式会社        | 清水建設株式会社        |
| 株式会社新高土木            | 株式会社スペース        | スターツ東海株式会社           | 株式会社扇港電機        |
| ダイキン工業株式会社          | 大興建設株式会社        | 株式会社竹中工務店            | 株式会社谷澤総合鑑定所     |
| 株式会社丹青社             | 中京テレビ放送株式会社     | 中部電力ミライズ株式会社         | 鉄建建設株式会社        |
| 株式会社東急設計コンサルタント     | 東京海上日動火災保険株式会社  | 株式会社東芝               | 東洋電機製造株式会社      |
| 戸田建設株式会社            | 西日本電信電話株式会社     | 西松建設株式会社             | 能美防災株式会社        |
| 株式会社長谷工コーポレーション     | 株式会社日立製作所       | 株式会社ファミリーマート         | 株式会社フジタ         |
| 株式会社不動テトラ           | ホーチキ株式会社        | ポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社 | 前田建設工業株式会社      |
| 三井住友海上火災保険株式会社      | 三井不動産株式会社       | 三井不動産ビルマネジメント株式会社    | 三菱商事株式会社        |
| 三菱電機株式会社            | 名高土木株式会社        | 名鉄E1エンジニア株式会社        | 名鉄エリアパートナーズ株式会社 |
| 株式会社森本組             | 株式会社ヤシマキザイ      | 若松物産株式会社             |                 |



「明治村だより」第113号(令和6年春号) 令和6年3月21日発行

発行 博物館明治村  
〒484-0000 愛知県犬山市宇内山1番地 電話 (0568)67-0314 <https://www.meijimura.com>

製作 大日本印刷株式会社

「明治村だより」第114号発行のお知らせ

発行時期 令和6年7月中旬予定  
「明治村だより」は、順次Webで公開させていただきます。詳しくは博物館明治村公式サイトをご覧ください。  
※郵送サービスは終了いたしました。ご了承ください。

表紙について 「絵はがき ハイカラ美人 第二集」画/発行 萩原幾喜(新陽館)、明治38(1905)年

# 幸田露伴「蝸牛庵」

## 「十兵衛」であり、「源太」でもある人物のすまゐ

館長 中川 武

### 一 幸田露伴の作品と人柄

のつけから私事にわたる思い出で恐縮だが、私が大学の助手として建築史研究室に配属されていた時、上司である教授が、幸田露伴の『五重塔』(註)をかなり熱心に読んでおられた。

其の三十四

(略)上りつめたる第五層の戸を押明けて今しもぬつと十兵衛半身あらせば、礫を投ぐるが如き暴雨の眼も明けさせず面を打ち、一ツ残りし耳までも扯断らむばかりに猛風の呼吸さへ為せず吹きかくるに、思はず一足退きしが屈せず奮つて立出でつ、欄を握むで屹と胸めば天は五月の闇より黒く、たゞ囂々たる風の音のみ宇宙に充て物騒がしく、さしも堅固の塔なれど虚空に高く聳えれば、どうくどつと風の来る度ゆらめき動きて、荒浪の上に揉まる、棚無し小舟のあはや傾覆らむ風情、

流石覚悟を極めたりしも又今更におもはれて、一期の大事死生の岐路と八万四千の身の毛豎たせ牙咬定めて眼を睜り、いざ其時はと手にして来し六分鑿の柄を、ばかり引握むでぞ、天命を静かに待つとも知るや知らずや、風雨いとはず塔の周囲を幾度となく徘徊する、怪しの男一人ありけり。(略)

露伴は擬古典調と呼ばれた文体の背景に、新しい近代世界と歴史的洞察を凝縮することを得意としていた。とりわけ『五重塔』は、世俗の機微には疎いが、創作へのデモニッシュなまでの意欲と並ならぬ自負を持つ大工のつそり十兵衛と、腕が達者で世間からの信用も篤い兄貴株の川越の源太のからみを主軸にして物語が展開する。谷中感応寺(天王寺)五重塔(註)をモデルとして、大工技術の奥深い伝統と、江戸後期に華開いた近代の芸術としての建築に通じる個人としての表現、そして根強い伝統倫理との葛藤の劇をそこに

あらためて『東京文学散歩』を読み返すと、その中で野田は蝸牛庵を次のように紹介している(註)。

#### 幸田露伴の蝸牛庵

幸田露伴は自分の家を蝸牛庵と称した。博覧強記の学者でもあった露伴のことだから、他に典拠があるのかもしれないが、殻を冠ったかたつむりの枝を這う姿が書齋にこもる貧乏文士が借家から借家へ家族を背負って移るのに似ているから蝸牛庵、と勝手に解釈しても大過はあるまい。

明治村に昭和四十七年三月から移築された蝸牛庵は、東京都墨田区向島五丁目、明治時代の寺島村元寺島千七百十六番地、甲州屋という酒店の別棟離れ二階建てで、露伴が明治

みることが出来る。

露伴という人は、この十兵衛と源太という両面性を持つ人として考えると分かりやすいのかもしれない。『五重塔』で垣間見える、古典文学や芭蕉の評釈、道教などの研究者の面と、中国・日本古典に題材をとった史伝小説家としての貌。そして忘れてはならないのは、伝統的な教養と江戸的な生活実感のもとに時代に厳しく掉さす一方で、新しい時代の息吹を大らかに受け入れる闊達さがみられることである。

これらの面は、戦中から戦後にかけて、ほぼ寝たきりになった露伴を世話した次女幸田文が炊事と看とりの仔細として記した『菅野の記』(註)が明らかにしている。『菅野の記』では、昭和二十一年(一九四六)年より居住した千葉県市川市菅野の借家での逼迫した事情をうかがうことができる一方で、たとえば猛烈な蚊の襲来に対して、かつて長く住んだ向島蝸牛庵での松葉いぶしを懐かしみ、次のように記されている。

(略)古い土火鉢へしつかりした燃え木を組んで置く。火が燃えあがる。刈っておいいた青草をもつさりとして載せる。もくもくと白い煙があがる。風が送る。部屋中の蚊は一遍にいなくなる。草が乾いて小さい焔があがる。今度は加減して草を片寄せて載せる。細い白い煙がいつまでも続いてあがる。その縁さきで父は湯あがりの晩酌をした。灰がたつちやいけな、煙が消えちやいけな、ああじゃいけな、こっじゃいけな。酒の肴のように文句を云つたが、私はなかなかうまかつた。(略)

幸田文の文章には、住むための深い生活技術と、父露伴への絶対的尊敬と、ある種闘いの三十年から四十一年ごろまでの三十歳から四十一歳の壮年期を過した家である。(略)

そして、蝸牛庵の裏手にある、赤ガラスの小窓をそなえた写真現像室に注目し、明治三十二年(一九〇九)年の幸田露伴作『新羽衣物語』という長篇小説が、写真機を初めて取り上げた明治の小説であったことを紹介している。またこの向島蝸牛庵が隅田河畔にあったことになんで、露伴が『水の東京』という都市河川論を明治三十五年に発表していることにも言及した(註)。

この向島蝸牛庵では明治三十四年に長女歌が、同三十七年に次女文が、同四十年には長男成豊が生まれている。この甲州屋離れの蝸牛庵時代が三人の子とともに平和で、かつ充実した時代であったと云う。その上五人の青年文学者たちが書生として同居し、私塾のような活気を呈するなか、先生の露伴は書齋十畳の丸窓に沿った机で仕事をしていったという。

それにしても甲州屋の離れである。この蝸牛庵には、土蔵や狭い廊下続きの離れ茶室、角力をとった庭などかなりの広さがあったことが推定される。『菅野の記』には、戦後の借家が狭く難儀したためか、向島蝸牛庵がよく思い出されていた。幸田文は名作『おとうと』の中で、太い川に沿って葉桜の土手が長く道をのべている、この辺りを叙景している。野田は「明治村に移されても向島蝸牛庵には明治の隅田川の水の匂いが立ち込めているような気がする」と述べている。その感慨は藤井が『東京文学散歩』を歩くの蝸牛庵跡の現況の節で、

(略)野田が「明治さながらの理髪屋」「アルバム東京文学散歩」と書いた自由軒は「J・Y・U・K・E・N」という名のモダン理髪店

意気込みが感じられる。幸田文という人物そのものが露伴の作品であり、その後の幸田文の文章によって露伴は新しい世界を生きたともいえそうである。とりわけ私たちが建築史の世界になじむものとしては、昭和四十年代中頃、焼失した奈良法輪寺三重塔の再建のために尽力した幸田文の振舞いの背景に、昭和三十三年に焼失した谷中感応寺に対する、のつそり十兵衛と川越の源太の想いを見てもまうのである。

蝸牛庵を考える時、露伴の作品の中でも一つ注目されるのは、慶滋保胤という平安期の歌人であり、数寄者の貴族を主人公とした、史伝的小説「連環記」(註)である。「連環記」では、隠棲文学の祖ともいわれる保胤の「池亭記」にも触れている。彼の住宅は確かに寝殿造風の配置形式を踏んではいるが、小規模であり、質朴で、山林への憧れが感じられる。後世の数寄屋住宅や草庵茶室に影響を与えたであろう中世隠遁文芸者の草庵の源流とも考えられている。露伴が自ら蝸牛庵と号し、自らの住まいをも蝸牛庵と名付け続けたのは、慶滋保胤の趣向があつたのかもしれない。

### 二 蝸牛庵の顛末

近年、藤井淑禎氏によって『東京文学散歩』を歩くという書籍が註が上梓された。明治文学の研究者として著名であり、また文学誌の編集や文学散歩の実践者でもあった野田宇太郎(一九〇九―一九八四)が、昭和二十六年の『日本読書新聞』の連載をまとめて翌年出版したのが、『新東京文学散歩』(角川文庫)であった。これがブームとなり、その後改訂増補、散歩経路の組み直しなどを重ね、最終的に

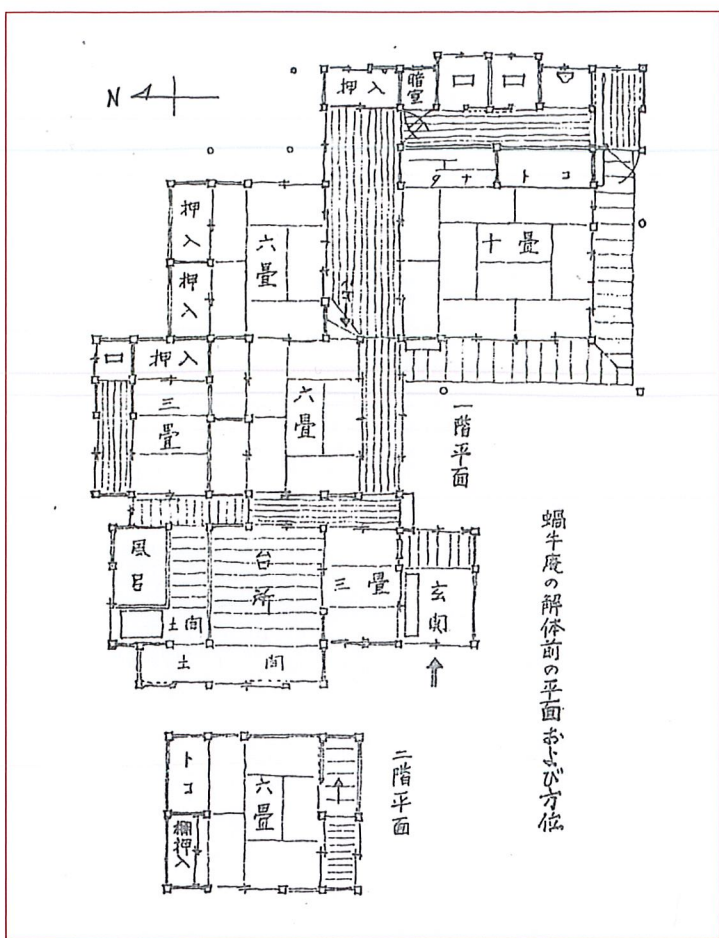


図1 蝸牛庵図面(移築前) 現状の方位では、十畳座敷の回り縁から北～東方向に隅田川ならぬ入鹿池を臨むように配置されている



写真1 明治村に移築された、現在の蝸牛庵

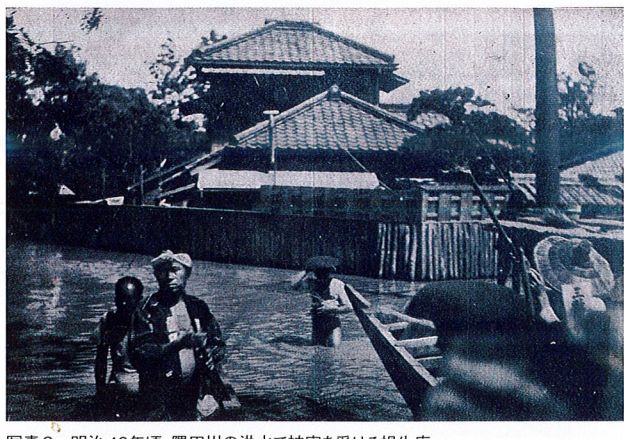


写真2 明治40年頃、隅田川の洪水で被害を受ける蝸牛庵 (雑誌「文章世界」明治40年9月号より)

に生まれ変わった。野田さんが見たら、狂喜して喜んだであろうことは請け合いだ。(略)と記した気持ちに相通するものがあるように思われる。

ともあれ野田も藤井も熱い想いで訪ねた寺島―甲州屋―向島蝸牛庵が、周辺の風景とともに彷彿とする。露伴はここに十一年間住み(第一蝸牛庵)、そのあと、そこから歩いて一、二分のところに新居を構えた。これを第二蝸牛庵とすれば、第一蝸牛庵の体験が生かされたものであっただろうが、具体的な内容はあまり紹介されていない。大正十三(一九二四)年頃、出版社との金銭トラブルのため立ち退かざるをえなくなり<sup>註七</sup>、この跡地は現在幸田露伴児童遊園となっている。その後住んだ、小石川伝通院蝸牛庵の前にも、以

前の蝸牛庵と同じく二百何十年といわれる大塚があったことが『菅野の記』に記されている。また幸田文の娘青木玉が『小石川の家』講談社、一九九四年)を刊行し、野田も藤井もこの小石川伝通院蝸牛庵を訪問しているが、いずれも内部の様子は詳らかではない。

酒類販売の甲州屋雨宮家から幸田露伴が借家した<sup>註八</sup>第一蝸牛庵が現在明治村にある蝸牛庵であることは間違いない。しかしながら、第一蝸牛庵がどのように住まわれていたかについては、残念ながら明治村への移築時に修理報告書が作成されなかったため、実際のところ詳細は分からない。けれども、深い土庇と切目回縁をもつ十畳座敷<sup>写真3</sup>の、床、棚、建具、長押等々の、細く、開放的な木割(比例的寸法関係)や意匠<sup>写真4</sup>と、この十畳を中心にして渦巻き状に放散する配置、とりわけ一間

幅の広い廊下<sup>写真5</sup>が自由な使い勝手の基地となっていること、小屋根や庇を重ねる多様な屋根形式と開口部等々により、通常の伝統の様式だけではない、自由で、開放的なデザインの息吹を感じるものとなっている。狭い渡り廊下の先に離れの茶室があったとすれば、十畳座敷が突出していることと合わせ、渦巻き状の住居であったことが想像される。あるいは露伴はここから自らを蝸牛庵と号したとも

とれそうである。江戸後期から明治初年にかけて、隅田川東墨堤沿いの地は、武家、豪商、演劇人等々の寮(別荘、隠棲の住まい)が多くあった。この地域は明治中期以後、中流以下の、民家系あるいは都市長屋系の庶民住宅が多く建立されたが、蝸牛庵がそれらとは一線を画し、変化に富んだ自由な風情を醸成しているのはそのため

である。露伴一家が棲んだ家として、末長く保存されるにふさわしいといえる。

註一 露伴二十五才の時に新聞「国会」に連載された小説「幸田露伴集 現代日本文学大系4」筑摩書房一九七一年

註二 寛政三(七九)二年再建、昭和三十三年放火焼失、文芸雑誌「藝林開歩」編者野田宇太郎の求めにより、八十才の露伴の近況として書かれた雑誌。註

註三 「現代日本文学大系4」より

註四 「日本評論」一九四一年四月―七月、註一に同じ「現代日本文学大系4」より

註五 「東京文学散歩」を歩く(藤井淑禎、ちくま新書二〇一三年七月)

註六 野田宇太郎「近代文学と明治村」(改訂版カラー明治村への招待)木村毅、野田宇太郎、谷口吉郎、淡交社一九八〇年

註七 出版社に売り払って惜しいことをしたと露伴は述懐して、それ以後住まいに恵まれなかったと菅野の記にあるので、幸田文が紹介する向島の蝸牛庵とはこれらの第一、第二蝸牛庵が入りまじっているのかもしれない。

註八 野田がその借家証書を註五の文献に掲載している



写真3 深く、軽快な土庇が伸びており、別荘地の開放的な住まいの風情がよく出ている。



写真4 十畳座敷の長押には、水鳥の釘隠しが打たれている。



写真6 一間幅の広い中廊下。踊りの師匠が稽古のために改造したとの説があるが...



写真5 十畳座敷の丸窓に沿って、露伴は仕事机を置いていたという記述が残されているが、現在の丸窓は後世に変えられたものかもしれない。

# 帝国ホテル・ライト館に使用されている色彩及び意匠について

## はじめに

博物館明治村では、帝国ホテル・ライト館<sup>註一</sup>の竣工百年を記念して、二〇二三年九月一日〜十二月十七日まで「特別展『東洋の宝石』」を開催いたしました。今号では展覧会開催に向けての調査の過程で、創建当初の写真から判明したライト館のインテリアの色や意匠を、古写真<sup>註二</sup>や北翼の客室完成直後に記録された宿泊記<sup>註三</sup>を基に紹介いたします。

## 建物内の色調について

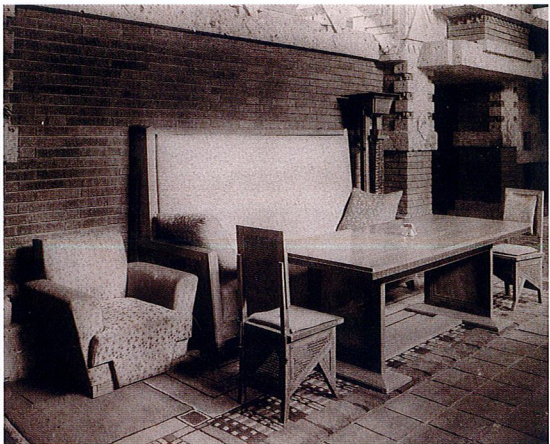
まずはロビーから。宿泊記にはロビーの様子を

…(前略)そこには眩惑される装飾美はありませんでした。煉瓦を彫刻的に積み重ねたような柱、かさかさした大谷石の棟木、砂壁の低い天井、しっとりとした厚味のある敷物、それ等が軟かい黄と緑を基調として巧みに統一され、落ち着いた調和をもって、(後略)、「玄関の正面が食堂になっています。広間と食堂とを区切る緑の垂幕を排して入ると(中略)」と記しているところから、ロビーは大谷石の灰色がかつた石の色、すだれレンガの黄みがかった色に加えて、絨毯はやわらかい黄色と緑色、そして玄関正面の食堂入口のカーテンは「緑色」であったことがわかります。

客室については、「重々しい広間から暗い廊



写真1 ライト館プロムナード(古写真①:右 オリジナル写真 / 左 AIによる着彩写真)



下を幾曲がりしてその部屋に入ると、世界が一変したような、明るさと軽さが、私を待っていました。寝床も椅子も垂幕も、一様にローズ色の塩瀬<sup>註四</sup>で張られ、机と扉は素木そのままの色を、天井と壁は薄い根岸<sup>註五</sup>で塗ってある、その皆が一度に明るく私の眼に入ってきたのでした。それは本当に人の心を伸伸と愉快にする部屋でした。

と記載し、黄色と緑色から、一転、「ローズ色」の空間に変化していることを驚きを以って伝えていきます。華やかなローズ色のファブリックに対して、ナチュラルな木製の家具や建具、壁の色は根岸色という日本の住宅などにある落ち着いた色を用います。室内に入って違和感を覚えることなく、寛いで過ごすことができる「人の心を伸伸と愉快にする部屋」と評しています。

ライト館で用いられた家具には、三種類のファブリックの存在が知られ、アメリカのニューヨーク近代美術館(以降、MOMAと記す)にそのサンプルが収蔵されています。博物館明治村で所蔵している室内を写した古写真からそのうちの二種類を確認することができ、MOMAのサンプルの色を基に、簡易なAIを用いて古写真に着彩を行いました(写真1、2)。

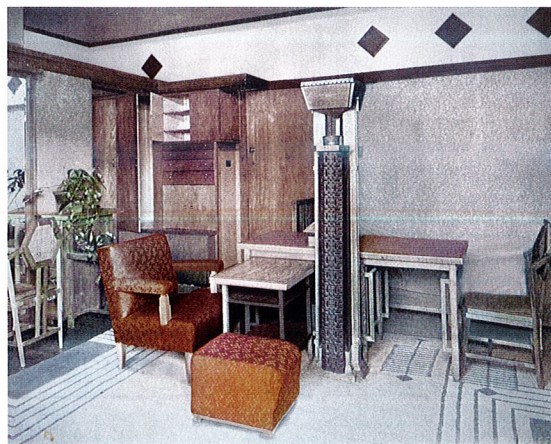
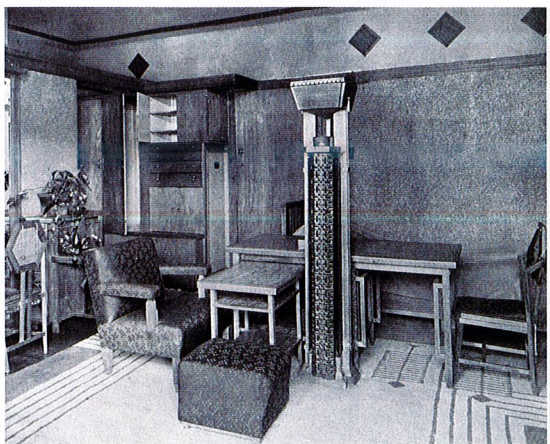


写真2 ライト館客室(古写真②:右 オリジナル写真 / 左 AIによる着彩写真)

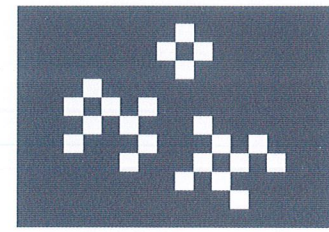


ない室内の生き生きとした様子が伝わってきます。また白黒写真だけの時よりも、よりインテリシアのディテールに意識が行くことに気づかされます。

### 意匠について

今回は室内の色だけでなく、意匠についても注目してみました。MOMAに遺されているフアブリックのモチーフは3種類です。四角(□)、三角(△)、丸(○)を用いたものです。ここでは、それぞれの意匠について、ご紹介いたします。

#### □ 四角



市松(石畳)

創建当初の客室を写した写真から、椅子の張地には「市松」とも「石畳」とも言われる、四角をモチーフとしていることがわかります。「市松」という名称が「心中万年草」という演目で、この文様の袴

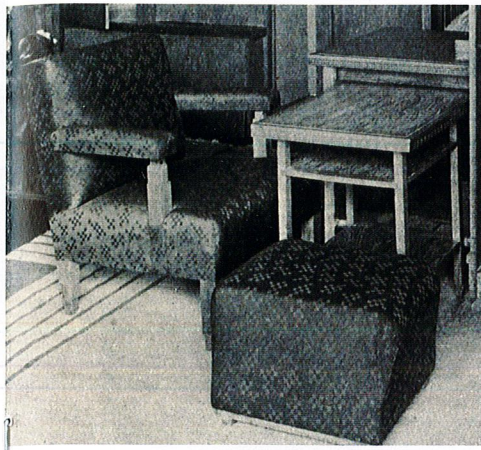


写真3 客室古写真拡大

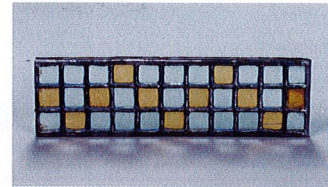
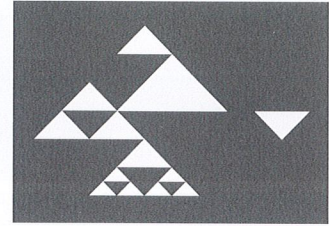


写真4 ライト館の窓の装飾部分

#### △ 三角



写真5 ライト館の装飾レンガ



鱗



写真6 色絵 鱗波文茶碗 (写真提供 北村美術館)

当館では所蔵していませんが、三角の意匠も用いられています。三角は日本では蛇や魚の「鱗」を文様化したものです。魔除けにもなったことから、厄年の人が身に着けると良いという伝承も残されています。京都の茶道具コレクションで有名な北村美術館で所蔵されている仁清の茶碗「色絵 鱗波文茶碗」

「碗」は鱗文の代表的な作例です。ライト館内に展示されているフランク・ロイド・ライトデザインの装飾窓「フランク・ロイド・ライト邸の窓」(写真7)は、建物があったアメリカ・ミネソタ州にあるミネトンカ湖のさざ波を表現したとも言われています。同じ三角形をモチーフとしているが、仁清の茶碗はそれぞれの角度が60度の正三角形、フランク・ロイド邸の窓は直角と45度の角度から構成される二等辺三角形がモチーフになっている点も興味深いです。

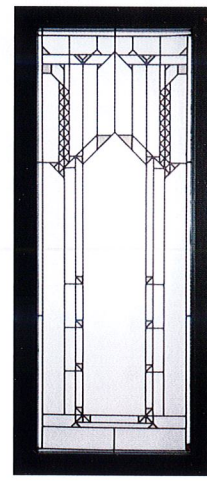
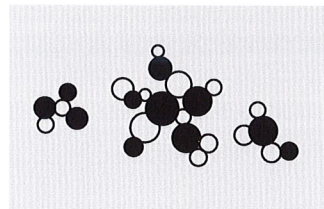


写真7 フランク・ロイド邸の窓

#### ○ 丸



つぼつぼ

プロムナードのソファやビーコックチェアのクッションのフアブリックには、まるで分子モデル(分子模型)のような、○をモチーフにした「ツボツボ」が用いられています。「ツボツボ」とは、耳慣れない言葉かもしれませんが、元来は、土製の丸い小壺のことで、京都伏見稲荷の稲荷山の土を入れ、田畑に埋め豊穰を祈願したもので、江戸時代半ば、表千家第六世寛々斎の頃に、伏見稲荷で買いた「ツボツボ」に(楽家註)て油薬をかけ焼いて、懐石に用いたとの記録

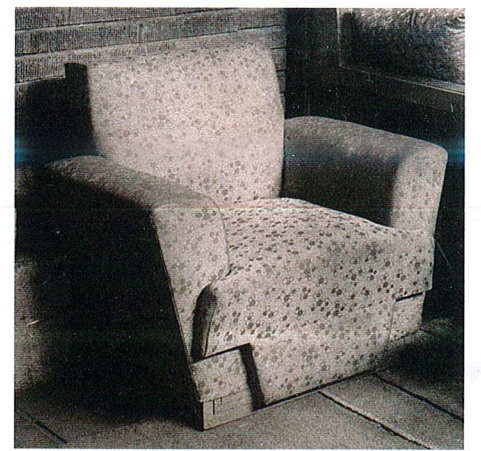


写真8 プロムナード古写真拡大

があり、茶室の席披きや茶事の際に、この「ツボツボ」になますを入れ、懐石膳に添えるようになりました。そこから「ツボツボ」文様が茶道具や掛け軸の表具など広く用いられるようになったのです。○を多用したものとしては、ライト館キャバレーのためにデザインされた食器(写真9、10)にも○が繰り返し用いられています。



写真9、10 ライト館キャバレーのためにデザインされた食器

形態を示し、禅宗の四大思想(地水火風)を、地(□)水(○)火(△)で象徴したとも言われています。

### おわりに

今回の展示では色彩の再現、そしてインテリアに用いられた意匠について紹介させていただきました。ライト館のロビーの色彩の「やわらかな黄色と緑色」は和室の畳と畳の緑の関係のようであり、客室の根岸色の壁も和室を想起させます。また、意匠においては日本の伝統的な意匠の影響を紹介いたしました。その意匠から、浮世絵の愛好家として知られているライトは、浮世絵のみならず幅広く日本の美術や禅の思想にも関心を持っていたと考えられます。

さらに忘れてはならないのは、ライトと恩物との関係です。今回の紙面で言及した三つの意匠は、まさに恩物で構成することができるとは思いません。ライトは幼いころ母親

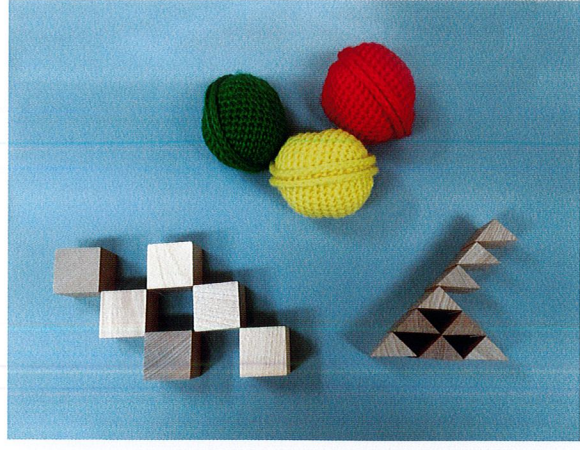


写真11

から与えられた恩物に親しんでいたと自身も語っています。その恩物で形作られる意匠を、日本の美術や建築の中に見出したのではないのでしょうか。ライト館で用いられた□・△・○は、ヨーロッパではジャポニズムの影響を受け一九〇〇年頃に流行した芸術運動「ゼツション」や一九二〇年頃に流行した「アール・デコ」においても□・△・○の意匠が用いられています。ライトは手紙の中にこう認めています。「(前略)私は日本の文化に脱帽し、その古い文化に忠実にしかも新しいものを作り出すにはどうしたらよいか、また古い文化を生かすにはどうしたらよいかを考え、そして実現しました。それが帝国ホテルです。尊ぶべき真の日本の姿を現すホテル建築は、今ではこれ一つしか残されていません(後略)」(註八)。

註一 帝国ホテル・ライト館は博物館明治村での文化財名称は「帝国ホテル中央玄関」。ここでは以降「ライト館」と表記。

註二 古写真は二種類所蔵している。①「帝国ホテル」(一九二二) 洪洋社) / © Wendingen - Frank Lloyd Wright. H.I.H.Wideveld 1925

註三 「新築の帝国ホテルに泊る記」生活に対する思ひ切った設備を裏見して「つる子」「主婦の友」(一九二二)年。文中では「宿泊記」と記載。

註四 塩瀬：細い生糸を糸系に、太い生糸を糸系に用いて平織りした織物。

註五 根岸：色の名前。英名はグレイッシュオリーブ。「根岸色」東京・根岸で取れる上質の壁土で上塗りした壁を「根岸壁」ということからつけられた色名。

註六 楽焼の茶碗を作る茶碗師の家系。

註七 ドイツの教育学者フレヘルが考案した世界初の教育玩具。球、立方体等、十種類の恩物がある。

註八 「フランク・ロイド・ライト 建築家への手紙」林愛作宛手紙 一九三六年七月六日付「フアブリアー」編 内井昭蔵訳 丸善株式会社 一九八六年

参考文献 「土製小壺と茶の湯のつぼつぼ」(東京都埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館「リーフレット 京都 No.98」(一九九七年二月))

2023.12 - 2024.2

# MEIJIMURA TOPICS

## 「明治村の雛祭り」を開催中

博物館明治村では、「年中行事を通じて季節を感じよう」と題し、年間を通じて様々な展示を行っています。2月3日(土)から3月31日(日)にかけては、上巳の節供として、「明治村の雛祭り」展示を開催しています。本展では、立雛、古今雛、芥子雛、土雛など、明治村が所蔵する全国各地の雛人形を展示しています。また坐漁荘1階床の間では、安産や魔除けのお守りでもある犬宮を展示しています。



## 「本邦初！明治村古墳特別公開」イベントを開催しました

1月20日(土)と2月3日(土)、「本邦初明治村古墳特別公開」イベントを開催し、両日合わせて50人以上のお客様(予約制)にご参加いただきました。

参加者の方々は、初めに第四高等学校物理化学教室で赤塚次郎先生(NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク理事長)の講義を聞き、その後現地でご墳見学を行いました。



## 明治謎解きアトラクション

# 江戸川乱歩の不完全な事件帖

～最奥に潜むもの～ 2.23 Fri. → 7.28 Sun.

**STORY**

舞台は明治のとある新聞社——  
若き女性編集長「春子」のもとで「確かな事実だけを記事にする」を信念とし、春子の幼馴染にしてこれまで数々のスクープをもたしてきた敏腕ジャーナリスト「金之助」、新米記者の「あなた」を中心に様々な記事を世に放っている。  
世紀の大怪盗「十二面相」との戦いは記憶に新しいが、最近ではめつきり話題を聞かなくなっていた。

金之助「暇だなあ」  
春子「ちょっと、金之助！怠けてないで、一つでも多くスクープを見つけてきなさいよ！」  
太郎「春子さん！金之助さん！新しい原稿ができました！すごいことが起きましたん！」  
探偵小説作家を目指す少年「太郎」が今日も原稿を持ってきたようだ。  
金之助「待っていたよ、太郎くん！これは大スクープの子感だな」

金之助はいつものとおり荒筋だけの原稿を読むなり、太郎の手を引き新聞社を出ていってしまった。  
毎度おなじみ太郎の「荒筋」から、さまざまな事件が動き出す——  
～最奥に潜むもの～

明治村

真実は、小説よりも奇なり。



明治謎解きアトラクション  
江戸川乱歩の不完全な事件帖  
～最奥に潜むもの～ 2.23 Fri. → 7.28 Sun.

MEITETSU

5.11 Sat. 始動!

Scoop03をクリアした方だけが挑戦できるコース 最難関コース。クリアに要する時間は計り知れない

- Scoop 01 - 一病者 700円	- Scoop 02 - 鏡実験 800円	- Scoop 03 - 白日夢 1,000円	- Scoop 04 - 黒い部屋 1,500円	- Scoop 05 - 先導者 1,800円
--------------------------	--------------------------	----------------------------	-----------------------------	----------------------------

※ Scoop04、Scoop05への挑戦は、参加条件がございます。

全コースクリア キャンペーン 5.11 Sat.～なくなり次第終了

先着で1,000名様に！  
ハ Scoop 01～05のすべてのコースをクリアされた方にはオリジナル記念品をプレゼント！  
記者七道具！「金之助の小型カメラ（リフレキケーホルダー）」

さらに！全コースクリアした江戸川乱歩の不完全な事件帖「スクラップブック風クリアファイル」  
※解決印が押されたコースすべての冊子を明治新聞社（受付）でご提示ください。

お得なセット販売  
Scoop 01 02 03 セット ⇒ 2,300円  
明治村住民登録票を提示してお得に挑戦しよう！！  
Scoop 01～05 各コース 50円引き  
Scoop 01 02 03 セット ⇒ 2,200円

**謎解きの流れ**

1. 太郎の「荒筋」を手に入れよう！  
明治新聞社（受付）で「参加キット」(Scoop01～05)を購入しよう！
2. 太郎と金之助と共に取材に向かえ！  
「参加キット」に書かれたルールをしっかりと読んで取材開始！
3. 記事を作成せよ！  
手がかりをもとに証言や真実を集め、記事を作成せよ！
4. 新聞発行！  
取材結果を記入し、明治新聞社（受付）で報告しよう！

※ 明治新聞社（受付）に「参加キット」を渡す際に、受付で「参加キット」のルールをしっかりと読んで取材開始！  
※ 歴史的建造物を活用したアトラクションのため、一部バリアフリーではない場所がございます。

その他の「江戸川乱歩の不完全な事件帖」をさらに楽しめる情報は明治村公式HPをチェック！

## 年中行事を通じて季節を感じよう！

季節にちなんだしつらいや飾りを行います。

**雛飾り** (上巳の節供)

地方色豊かな雛人形をご紹介します。

期間 2/3(土)～3/31(日)

会場 三重県庁舎

**菖蒲飾り** (端午の節供)

武者人形の展示を行うほか、期間限定で鯉のぼりや菖蒲飾りを行います。

期間 3/30(土)～5/26(日)

会場 村内各所

**七夕飾り** (七夕の節供)

短冊に願い事を書いて、笹に飾ろう！

期間 6/22(土)～7/7(日)

会場 三重県尋常師範学校・蔵持小学校前

## 北里柴三郎、新千円札の肖像に！

### 北里研究所本館・医学館常設展示リニューアル！

# 5/11(土)より公開！

顕微鏡での研究のため北里研究所は、部屋を北側に配し、安定した光によって細菌学研究を行い、恐れられていた感染症の原因を究明し、多くの人々の命を支える杖となりました。研究のために工夫された建物の特徴に加え、細菌学研究に貢献した顕微鏡の歴史、そして北里柴三郎が中心となり取り組んできた感染症との闘いの歴史や、今なお絶え間なく行われている取り組みについてご紹介します。




出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」

北里柴三郎編纂  
『肺結核の注意書』  
(明治44年日本赤十字社発行)

トークセッション  
「感染症との闘い—これまで、そしてこれから—」

5/16(木) 13時より開催！

新型コロナウイルス感染症対策分科会会長等を歴任、結核予防会理事長である尾身茂氏をゲストに、近代以降日本で結核等の感染症とどう闘い、今後どう向き合うか、阿川村長・中川館長とともにお話しいただきます。



尾身 茂  
(公益財団法人結核予防会理事長)



阿川 佐和子  
(明治村村長) 撮影：伊木 功



中川 武  
(明治村館長)

応募方法

応募 右記の二次元コードよりご応募ください。

締切 2024年4月19日(金)

※2名様まで応募可能(同伴者様の記載がない場合は1名様でのご応募とさせていただきます)。  
※当選発表は、当選者様へのご案内の送付をもってかえさせていただきます。



## 花と果実グルメ 2/23(金・祝)～7/28(日)

春や初夏を感じるグルメが大集合！ぜひご賞味あれ。 ※売り切れの場合はご容赦願います。

マンゴーとバインのケーキ ▶ 650円 帝国ホテル喫茶室

果肉たっぷりのバインとマンゴーの風味が口いっぱいに広がり気分はもうトロピカル！

餅のシャベット ▶ ※牛鍋お食事後のデザート

牛鍋各種 5,000円～6,000円 牛鍋 大井牛肉店

牛鍋を食べた後には、さっぱりとした味わいのシャベットをどうぞ。

葉の花とアサリの卵とじ御膳 1,800円 和食処 碧水亭

葉の花とアサリの旨味がたっぷり。春の訪れを感じられるボリューム満点な御膳。

あいすくりん 桜ゼリー 添え ▶ 450円 食道楽のカフェ

ほんのり香る桜のゼリーに、バニラアイスと桜の塩漬けをトッピング。

葉の花のクリームコロッケ ▶ 1個 300円 「食道楽のコロッケ」の店

素材の食感が楽しめる、濃厚な味わいのクリームコロッケ。

開催日 5/18(土)、5/25(土)

時間 ①11:00～②13:30～(各回約60分)

料金 お1人様1,500円(各回20名様)

会場 聖ザビエル天主堂

詳細・申込

右記の二次元コードよりご確認、お申し込みください。



企画展 「乱歩 人間模様」

江戸川乱歩の作品に描かれた「人物」を、イラストとともに金城学院大学文学部小松ゼミの皆さんの文章でご紹介するほか、乱歩とその友人らの間で交わされた書簡を展示します。

期間 3/16(土)～7/28(日)

会場 宇治山田郵便局舎 企画展示室

協力 金城学院大学文学部小松ゼミ

画像提供 / 平井 憲太郎

各イベントの詳細・お問い合わせ先 <https://www.meijimura.com> または 0568-67-0314 ※イベントは予告なく変更・中止となる場合があります。 ※イベントのご参加には別途入場料等が必要です。

明治村1丁目の「鉄道局新橋工場」(写真1)では、日本で最初の皇后用御料車として製造された「昭憲皇太后御料車(5号御料車)」を展示しています。椅子の張地から小さな釘の頭部に至るまで華麗な装飾が施されたこの御料車。その中でも特に印象的なのが、橋本雅邦と川端玉章が描いた天井画でしょう。以前の「明治村だより」(註2)では、雅邦が描いた「桜花紅葉図」の技法についてご紹介しましたが、今回は玉章「帰雁来燕」の構図について注目してみたいと思います。

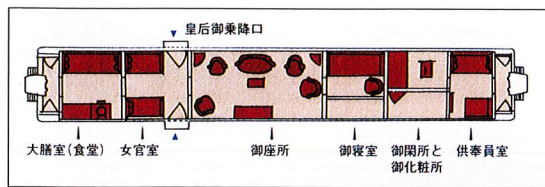


図 御料車図面

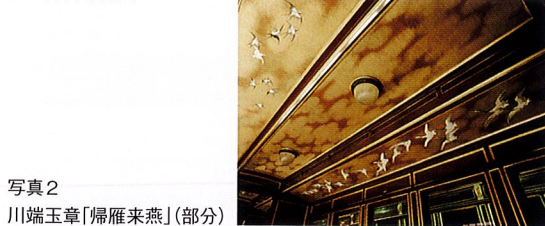


写真2 川端玉章「帰雁来燕」(部分)



写真3 「帰雁来燕」雁部分(上)と燕部分(下)

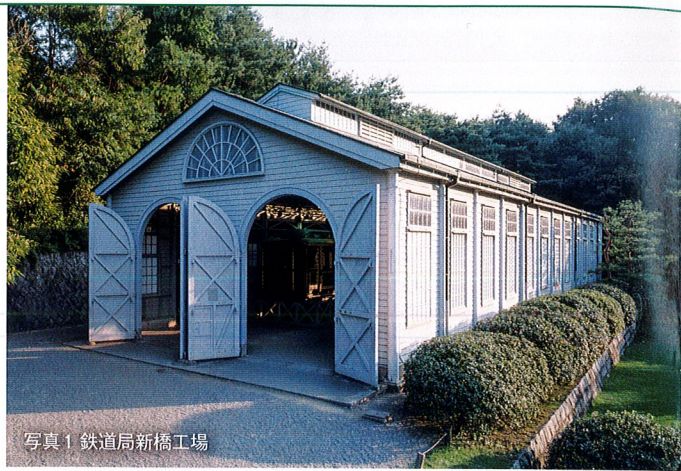


写真1 鉄道局新橋工場

## 新時代を具現化する天井画

1丁目12番地 鉄道局新橋工場

んでいる雁と燕たちのほとんどが、腹部を見せている構図という点です(写真3)。これは西洋建築の天井画の影響によるものを見て間違い無いでしょう。現在では当たり前のように思われる「本」に、見上げた空に雁と燕が飛んでいるような姿で描く」という行為自体、明治時代の日本画においては、まだまだ珍しいことだったので。

明治までの日本絵画では、鳥の姿は横から、もしくは上から見た姿で描かれていることがほとんどです。粉本(註3)をもとに「様式」として画技を習得していた近世までの絵画には、写生によるリアリティの再現という意識はほとんどありませんでした。

一方で、ルネサンス以降、平面に三次元を作り出すことに専心してきた西洋絵画の天井画は、室内にあたかも空が広がっているかのような情景を描き出してきました。その空を飛ぶ鳥は、私たちが空を見上げた時に目にする鳥と、同じ姿でなければなりません。当然、飛んでいる鳥を下から見たらお腹のあたりが見えるでしょう。日本画の中でも写生を重んじる四条派に入門し、一時は西洋画も学んだ玉章は、この考え方を導入したのです。「御座所は列車が動いているときに着席する場所。御座所の「帰雁来燕」は鳥たちが飛びかう、動の天井画であるのに対し、女官室と御寝室の「桜花紅葉図」は、静といえます。この御料車で移動されたであろう昭憲皇太后は、限られた空間の中、ふと見上げた瞬間、窓外を飛ぶ鳥たちと同様に頭上を飛び行く鳥たちの姿をみて、癒されていたのかもしれない。

ともに当時日本画界の重鎮と目され、

帝室技芸員であった川端玉章と橋本雅邦は、御料車が完成する十年余り前、東京美術学校に教員として迎えられました。東京美術学校幹事である岡倉天心に見込まれたこと。天心は東京美術学校の目的を「過去美術の凡てを総合し、今日の知識をもて如何に之れを利用すべきかといふ問題を学生に与ふる」こととし、そのために「先づ日本美術の歴史の根柢を牢くし、さて後西洋美術の精華をも参酌せしめん」註3としていました。玉章の天井画は、まさにこの天心の言葉を実行しています。玉章が天心の考え方に強く賛同していた証ともいえるでしょう。御料車の天井画を制作するにあたり、「帰雁来燕」という主題を決めたのが誰なのかはわかりません。しかし、決めたのが発注側の宮内省だったとしても、「どう描くか」は専門家である絵師本人に任されていたはず。御座所の天井画には、皇室が使用する「御料車」という新たな乗物の空間を、それまでにない新たな日本画で飾ろうとする、玉章の意気込みが感じられるのです。

註1 「明治村だより」ナンバー86、二〇一六年  
註2 狩野派や四条派など、伝統的な日本絵画習得のために使用された絵手本。  
註3 岡倉覚三「東京美術学校の由来と方針」『早稲田文学』二二、一八九六年一月  
主な参考文献  
(1) 内閣府 赤坂離宮迎賓館ホームページ「天井絵画 作品解説会」解説要旨①のうち、越川倫明氏「ルネサンス以来のイタリア天井画の伝統 - 迎賓館赤坂離宮天井絵画の祖先たち -」  
https://www.geihinkan.go.jp/akasaki/akasaki\_news/20230317/  
(2) 没後一〇年特別展 菱田春草「故郷に帰る」  
珠玉の名画「飯田市美術博物館」二〇二二年十月  
「春草没後八十周年記念 天心傘下の巨匠たち」  
初期作品を中心として「飯田市美術博物館」  
一九九一年十月



## 建物に垂れ下がる飾り「瓔珞」

1丁目8番地 西郷従道邸

東京都目黒区上目黒の広大な敷地に建てられた西郷従道邸(以降は「西郷邸」とする)は、薄いブルーグレーを基調とした爽やかな外観で、明治村でも人気の建物の一つで

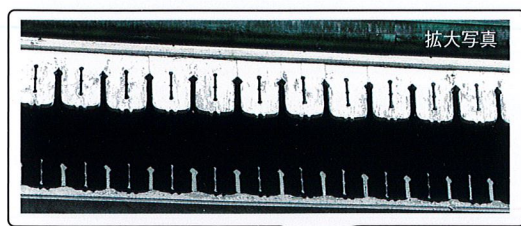


写真1



写真2 二階ベランダ柱の持送り

写真3 一階ベランダ柱の持送り



写真4 日本赤十字社中央病院病棟南西



写真5 宇治山田郵便局舎西南

す。一階と二階にある半円形のせり出したベランダが特徴的で、二階ベランダの切り抜き板の手摺子が上品さと軽快さを醸し出しています。今回注目するのは軒飾りです(写真1)。通称、「瓔珞」と呼ばれています(註2)。ベランダと破風板、軒先にぐるりと連なる瓔珞は、手摺子とともに白色と相まって建物を縁取るレースのようで、外観のアクセントとなっています。とここで、「瓔珞」という名前、いまいち聞き慣れないですが、語源を辿るともともとはインドの珠玉を綴った首飾りを指すようです。それがのちに仏像につけられる装身具も指すようになり、仏像の部上にかざす天蓋に装飾したり、仏堂の軒などにつけられたり(註3)、「仏像周辺を装飾する垂れ飾り」という広い意味で捉えられてきました。そして、明治時代に日本に洋風建築が入ってくると、破風や軒などにつけられる連な

る垂れ飾りのことも瓔珞と呼ぶようになってきました。これは、当時の洋風建築を実際に施工したのが日本の大工棟梁であったからだと考えられます。設計者からの指示もしくは華やかな西洋の建物を見た日本の大工たちが、建物の装飾を考えたときに浮かんだものが、これまで自分たちの領域であった寺社建築の装飾技巧であったことは想像できます。

西郷邸の場合は、設計はフランス人技師レスカスだと推定していますが、施工は恐らく日本人大工でしょう。西郷邸は明治二十二年(一八八九)年の天皇の行幸に合わせ二階ベランダの屋根を後補しており(註3)、印象的なベランダの瓔珞はこのとき付けられたものです。一階二階ベランダをよく見てみると、例えばベランダの柱にある持送り(写真2、3)は、それぞれデザインが異なり、特に後補された二階部分は西洋でよく用いられるアカンサスのようにも見えますが、寺社建築でよく見られる唐草にも雲に

も見え、どこなく「日本らしさ」を感じさせます。今回取り上げた瓔珞は明治村の他の建物でも確認できます。例えば、四丁目の日本赤十字社中央病院病棟です(写真4)。他には、宇治山田郵便局舎の底部分にも垂れていますが(写真5)。洋風建築の装飾という、胡麻幹決りて表現した束ね柱や黒漆塗の隅石積(註4)がよく見られますが、瓔珞もその代名詞の一つと言えるでしょう。ぜひ探してみてください。

明治村では建造された際の詳細な記録が残る建物は多くありませんが、細部をよく見てみると違和感があったり他の建物との類似点があったりします。小さな部分からさまざまな想像力を働かせてみるのも、建物を見るとき楽しさかもしれません。

註1 「明治村建造物移築工事報告書(二)」では、軒廻りについて「陸梁を敷桁の外へ(中略)陸梁端先を鼻懸して揃え、それに瓔珞を下げて、上から野地板を被せている」とある。  
註2 「建築大辞典」での「瓔珞」は「①菩薩以下に付けられる装身具。金銀宝石類を綴り合わせたもので頭・頸・胸などにつける。②天蓋の縁。仏堂の軒、初期洋風建築の破風や垂木鼻などに取付けられた線形付きの垂れ飾り。俗に「涎掛け」ともいう」とある。  
註3 参考(1)および(2)より。現在の東、西側に面するベランダの屋根もともに整備されている。和風東ね柱や隅石積は二丁目の東山梨郡役所でも確認できる。  
註4 財団法人博物館明治村「明治村建造物移築工事報告書(二)」一八七七年、加藤安雄、音川村松貞次郎、岡建世、本多昭一、加藤安雄、音川村松貞次郎「明治村建造物移築工事報告書(二)」一九六八年、青木繁ほか編「建築大辞典(影印版、初版)諸橋徹次編(大漢和辞典(大修館書店、縮写版))」